

播州門徒追弔法要案内

いのちの真実を知る

本徳寺の境内には、戦争で亡くなられた方々を悼む記念碑がいくつも建てられています。西南戦争、日清戦争・日露戦争、日中戦争（写真中央）と、それぞれの戦争の悲惨さが刻まれており、多くの犠牲者が出た事実を、私たちは決して忘れることができません。

しかし、戦争が終わった後の日本社会でも、大量にものを作り、大量に消費する暮らしの中、「平和」という言葉の裏側で、戦時中でもないにもかかわらず、多くの「いのち」が知らないうちに押しつぶされている、という現代文明の恐ろしさを感じずにはいられません。

もしかすると、戦後の一見平和で豊かに見える経済も、次の大きな悲劇までの「幕間（まくあい）」に過ぎないのかもしれない。

自分を犠牲にすることが美德とされなくなった時代、社会は「自分は何でもできる」という思い上がり、他人を思いやる想像力の欠如によって、誰もが誰をも傷つけかねない厳しい世の中になってしまいました。

冷静に近代という激動の時代を振り返ってみると、戦前も、戦争のさなかも、そして戦後も、人間の本质そのものは少しも変わっていないことに気づかされます。

仏さまの前で、ご縁のあった犠牲者の方々に心から追悼の誠を捧げるとき、私たちは、不完全な文化や価値観の中でしか生きることができない人間の根深い問題——仏教という「宿業（しゅくごう）」——に突き当たります。この、自分で自分を縛ってしまう苦しみが始まって以来、法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）はずつとこの問題と向き合い続け、その解決のために必要な「信心」と「名号」を完成され、阿弥陀仏となら



日支事変戦没者追弔碑
亀山本徳寺境内

れました。その仏さまの願いを、今一度深く考えてみたいと思います。

さて、これまで長い間、篤い信心に生きた世話方の皆さまや門信徒の方々は、この本徳寺を心のよりどころとしてこられました。

こうしたお世話方・門信徒の方々の報恩の行いは、「人間が本来にしあわせになる道は、自身自身の宿業の問題を解決することにある。そしてそのためには、仏さまから願われている『い

のち』として自分自身が存在していることに気づくしかない」ということを、身をもって示してくださいましたものです。

平成十四年度までは、戦争で亡くなられた方々と亡くなられた世話役の方々のための追弔法要をお勤めしておりました。戦没者の多くは真宗のご門徒であり、この法要に参加される方も真宗門徒に限られていたことから、平成十八年度からは、ご遺族はもちろん、本徳寺の廟所に納骨された、本徳寺にご縁のある門信徒の皆さまも含めて、播州門徒の追弔法要をお勤めさせていただきます。

とりわけ、ご生前に本徳寺のお世話役をお務めくださった方々や、本徳寺にご縁のあったご門徒の皆さまのご苦勞を、しのばせていただきたく存じます。

この機会に、先達（先に往かれた方々）の「いのち」と正面から向き合い、阿弥陀仏が願っておられる「いのち」の真実に気づかせていただき、自分自身の「いのち」の全容を、納得のいくかたちで自覚していたければ、これに勝る喜びはございません。

つきましては、九月六日（日曜日）午後一時より、亀山本徳寺本堂にて「本徳寺世話役追弔法要・播州門徒追弔法要」をお勤めいたします。ぜひともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

本徳寺住職 大谷昭仁

